

コラージュにおける自己像・他者像と アタッチメントスタイル

園田直子¹⁾
片岡祥²⁾

要 約

本研究は、コラージュにおける自己像・他者像の有無とアタッチメントスタイルを測定する尺度である ECR の二つの要素、すなわち「見捨てられ不安」と「回避傾向」の関係を検討するものである。結果より、コラージュにおける自己像の有無は「見捨てられ不安」と関係があり、他者像の有無は「回避傾向」と関係があることが示された。ただし、単に「無い」のではなく、人物像が実写の写真ではなくイラストや他のものに置き換えられていること、または自己や他者の存在が「わからない」という人物像の曖昧さが不安の高さおよび回避の高さと関係していた。ECR によるアタッチメントスタイル別に比較したところ、よりその傾向が明確になった。さらに、写真の量、全体のまとまりに関してアタッチメントスタイルごとに AAI で示唆される話の長さ、話の一貫性などの語りの特徴に対応する特徴がみられた。

キーワード：コラージュ、アタッチメントスタイル、ECR、自己像、他者像

問題と目的

園田・穴井・津田 (2003)、園田・穴井 (2003)、穴井・園田・津田 (2003) は育児期女性の心理的支援のための講座のプログラムの中でコラージュを使用してきた。この講座は育児期の女性が自分をとらえなおし、自分の欲求や希望を再確認することで育児期を意味あるものとみなすと同時に、育児期に限定しない自分自身の生き方について見直すことをねらったものであった。その中で言葉を使って自分の人生を再構成する「展望地図法」(園田・穴井2003)と並んでイメージで人生を再構成する「将来コラージュ」法を用いた。園田(印刷中)で報告されているように、言葉ではうまく表現できなかった自分の欲求や願望がコラージュというイメージを用いた投影法によって見えてくるといふ参加者の感想は多くきかれ、言葉を用いない方法で

自己を表現することの重要さが示唆される。また非言語的な自己表現は言葉で自分を表すことに抵抗のある参加者にとってはより自分らしく、自己の肯定的な側面に焦点をあてやすい(園田・Leuers, 2001)。

コラージュの解釈についてはさまざまに試みられている(森谷他1993, 杉浦1994)が、バウムテストやロールシャッハテストのような厳密な解釈のルールは確立されていない。これはこの手法が診断のためのテストではなく、自己表現することそのものに重点をおかれてきたためである。本研究はコラージュのそのような実践的な意味を重視しつつ、コラージュ表現を読み解く手がかりを得るために「コラージュにおける人物像の意味」と「コラージュに使用するアイテムの量とまとまり」の二つの側面に焦点をあて、それがどのような心理的特性と関係しているのかを明らかにすることを目的としている。特に、自己観と他者観の総体であ

1) 久留米大学文学部

2) 久留米大学大学院心理学研究科修士課程

るアタッチメントスタイルの内的作業モデルの視点からコラージュの特徴を見ていく。

コラージュと心理的特性の関連に関する研究として、Sense of Coherence (SOC) (アントノフスキー, 2000) の観点から、園田・穴井・津田 (2003) は、SOC の強い者は「自分がある」(これが自分であると本人が示せるような人物の写真を、たいていは大きく中央に貼っている) こと、将来への希望や「～がしたい」という将来の欲求をあらわしたり、これまでの自分の履歴を物語ったりするような具体的なストーリーを表すようなアイテムを貼っていることを見出している。一方、SOC の弱い者は、人物、とりわけ自分に対応するような人物を貼ることがなく、アイテムの数およびバラエティが少なかった。さらに、穴井・園田・津田 (2004) では、SOC 尺度得点が高得点でも、講座終了後に得点が急低落する「硬い SOC」保持者は、重ね貼りが多く、全く空白がないこと、アイテム数が非常に多い上に未整理で「ごちゃごちゃしている」という印象を受ける「過剰で雑多」であるという結果を示している。また、多くの参加者はコラージュ製作を楽しむが、中には困難を感じる人もいたことがわかってきた。

園田・近藤 (2006) では、このような問題を整理するために、コラージュを見る際に自己のさまざまな側面がどのようにコラージュの形式に反映しているかについて大学生を対象に検討した。その中で、コラージュと Sense of Coherence (SOC)、抑うつ、特性不安尺度との関係、およびコラージュの形式 (空白の多さ、自分の有無)、コラージュの評価 (現実性) との間の関係を分析した。その結果、次の知見が得られた。(1) SOC の低さ、抑うつ、特性不安が高いことはコラージュによる自己表現の不全感につながっていた。すなわち、このような人はコラージュ作成が楽しめず、また作ることに困難を感じ、できあがったコラージュに対しても肯定的な感情がもちにくかった。(2) コラージュにおける現実性は「抑うつ」の高さと負の相関がある。すなわち、抑うつが高い人は現実の世界より自己の内的な世界に注意が向いており、非現実的なコラージュをつくと解釈された。(3) 特性不安が高いほど、空白が少ない (多量の写真を重ね貼りする)。空白が多すぎる場合は SOC の低さとの関係が考えられるが、反対に、多量のアイテムを重ね貼りする過剰な印象のコラージュは特性不安の高さをあらわしていることがわかった。(4) コラージュの中に「自分を貼る」ことは SOC の「適度な」高さとの関係があった。SOC が最

も高い群は「高すぎる SOC」と考えられるが、この群はむしろ「自分」が少なく、SOC が 2 番目に高い群がもっとも「自分を貼る」割合が高かった。そして、SOC 尺度得点が低くなるにつれ、自分を貼る割合は下降していた。

コラージュにおける「自分の有無」は次の点からも重要であると考えられる。コラージュに自分を貼る場合、自分自身の写真はないので、自分のイメージに近い写真を選んで自分に置き換えることが必要になる。そのためには現在の自分のイメージや、こうなりたいという自分の人物像が客観的に把握できていること、自分と他者との類似性と違いが明確に区別されていること、自分でない人物を自分であると読み替える柔軟性、自分でない人物に自分を投影しても自分らしさがゆるがない自我の強さなどの総合的な自己概念のありかたが「自分らしい人物像の写真を貼る」という行動に反映されるのである。

園田・近藤 (2003) ではコラージュに貼られた人物について「自分」であるかどうかにはしか注目しなかったが、実際には複数の人物が貼られていることが多く、必ずしも自分であるとは限らない。それは参加者にとって重要な他者である可能性がある。また、「自分はいるが、他のもの (動物や植物、物) に置き換えられている」という参加者の報告もあった。ちなみに、貼ってある写真が自分かどうかということは、ほとんど全員が理屈ではなく感覚的に、ほとんどの場合即座に答えられる。本人にとって自他の区別は自明であるといえよう。そこで本研究では、第一の観点としてコラージュの中の「自己」だけでなく「他者」、または自分や他者を投影したものと考えられる「動物」の存在も含め、コラージュの中の人物像について検討する。第二の観点としては特性不安の高さとの関連のあったコラージュ全体のまとまり (写真の量と全体の統一感) を分析対象とした。

この観点をういた理論的背景としては、はじめに述べたようにアタッチメントスタイルの内的作業モデル理論を念頭においた。第一に、自己観・他者観を依存すなわち「見捨てられ不安」の高低および「親密な関係の回避」の高低の組み合わせによって 4 つの型に分ける 4 カテゴリーモデルのアタッチメント理論 (Bartholomew, 1990)、第二にインタビューによる成人のアタッチメントスタイルについての研究 (Main & Golodwyn, 1984 の Adult Attachment Interview: AAI) である。AAI の分析観点の詳細は割愛するが、本研究との関連では、(1) 語りが首尾一貫し

ているかどうか、(2) 量が多すぎず少なすぎず適切であるかどうか、(3) 語りの様式が整っており、かつ紋切り型ではなく生き生きしているかどうか、などの観点がコラージュを解説する視点としても役立つと考えた。

安藤・遠藤 (2005) はこの観点にしたがって4カテゴリーモデルの語りを特徴づけている。それによると自己観も他者観も肯定的 (不安も回避も低い) 「安定型」は、理解可能なストーリーを首尾一貫した形で語る。それは記憶の中のアタッチメント対象に防衛や恐れなく容易に表象的に接近できることを意味している。また、自己観は肯定的で他者観は否定的 (不安は低い回避が高い) 「軽視型 (拒絶型)」はアタッチメント対象との関係を理想化して語るが、具体的なエピソードが「思い出せな」かったり「矛盾」していたりする。また往々にして語りは最小限にとどめられ、短い。これはアタッチメント対象の表象に接近することができないことを示している。自己観が否定的で他者観が肯定的 (不安が高く、回避が低い) 「とらわれ型」は曖昧なことばを多用し、話しは冗長でまとまりがなく、感情的に混乱してしまうことがある。アタッチメント対象に対しての依存と葛藤を引きずっていると解釈されている。自己観も他者観も否定的 (不安が高く、回避も高い) 「恐れ型」は話しの内容にはそれなりに一貫性があるが、“魔術的な解釈”や非現実的な思い込みがみとめられる。過去の分離や喪失などの外傷体験をまだ心理的に解決していないと考えられている。

本研究ではAAIにおける、このような自己と他者に関する内的表象や記憶情報への接近や回避の理論がコラージュ表現の個人差をどの程度説明できるかを検討する。

本研究に先立って、園田・片岡 (2007) は愛着スタイルと他の心理的尺度との関連を検討するために、ECR 尺度恋人版 ECR (the Experiences in Close Relationships inventory, Brennan, Clark & Shaver, 1998), 中尾・加藤 (2002) 訳) と親友版 ECR (加藤, 2001) で測定した愛着スタイルと、SOC, 時間的展望体験尺度 (白井, 1997), CAQ 版 ER 尺度 (CAQ-Ego-Resiliency Scale (Block, 1991; 中尾・加藤, 2005)) との関連を分析した。その結果、ECR の「不安」と「回避」は他の尺度と負の相関を示していた。特に「不安」はすべての尺度と負の相関を示し、とりわけ SOC および対自 ER との間には強い負の相関があった。また4つの AS (安定型, 拒絶型, とらわれ型, 恐れ型) に被験者を分類し、各尺度の得点を

比較したところ適応上望ましい尺度 (SOC, 時間的展望体験尺度, CAQ 版 ER 尺度) については、いずれも「安定型」の得点が高く、「拒絶型」がそれに続いている。もっとも得点が高いのは「恐れ型」であった。このように、愛着スタイルは SOC などの適応尺度と関連があり、いずれも自己観および他者観を反映していると考えられる。特に他者観に関わる「回避」よりも自己観に関わる「不安」の高さが精神的な適応と関係があるといえよう。また SOC の高低とコラージュ表現には関連があったことから、アタッチメントスタイルとコラージュ表現にも関連が見出せると予想できる。

さらに園田・片岡 (2007) では愛着スタイルとアタッチメントを喚起するような文章完成法における文章のスタイルとの関連についても検討した。文章完成法を用いた研究は酒井 (1998) などがあるが、ここでは文章の内容ではなく、文章の形態 (文章の量, 表現の特徴など) に焦点をあてた。その結果、「とらわれ型」は文章の量が多く他者への言及が多い、「拒絶型」は文章が短く、他者への言及が少ない、「恐れ型」は了解不能の表現が多い、安定型は目立った特徴がなくバランスがとれているなどの特徴がみられた。これは Main & Goldwyn (1984) が指摘しているように、アタッチメントスタイルは現在の親密な他者との関係のとりかただけに関連するのではなく、内的作業モデルとしての自己や他者の表象に対する認知的情報処理の基本的な特性に影響を及ぼしていることが、AAI のような半構造化面接を行わずとも短い文章記述においても如実に表れることをものがたっている。このような認知的情報処理の違いは自分についてのコラージュというイメージ表現においてもみられるのではないだろうか。

以上のことから、本研究で明らかにしようとするのは次の3点である。(1) コラージュにおける「自分」「他者」「動物」の有無と ECR 尺度における「不安」と「回避」との関連を検討する。自分の有無は「不安」の高低と、他者の有無は「回避」の高低と関連していると予想できる。すなわち、不安の高い人は「自分」を貼らないであろう。また「回避」の高い人は「他者」を貼らないであろう。(2) コラージュに使用されている写真の量およびまとまりとアタッチメントスタイルの関連。すなわち、「拒絶型」は写真が少なく、「とらわれ型」は写真が多いと予想できる。(3) その他、コラージュを通じた自己表現の不全感または満足感とア

タッチメントスタイルとの関連などについてもあわせて検討する。

方 法

被験者 大学生100名（男25名 女75名）（平均年齢21.5歳）。

調査時期 2006年12月

コラージュの作成 材料：A3の白紙、のり、はさみ、雑誌。本実験では、マガジン・フォト・コラージュ法（ランドガーデン、2003）を用いた。まず、「これからの私」というテーマでコラージュを作成することを伝えた。次に作りたい作品のイメージを思い浮かべ、雑誌などの写真の中からそのイメージに合うもの、自分の心ひかれるものを選んでもらった。その後写真を好きな形や大きさに切り抜き、台紙の上に配置する。配置ができたら最後に糊で貼り付けるよう求めた（完成までの時間は60～90分）。

人物の有無の評定 コラージュ作成後、①コラージュの中の自己、他者、動物の有無について被験者自身が評定する。教示内容：「自分のコラージュを見て、『自分や他者の写真が貼ってあるかどうか』について回答してください（貼ってないけど、このあたりにいる、という場合は「いない」と答えてください。）自分や他者は人間ではない場合もあります」。自分自身については（1）自分自身が貼ってあるかどうか（2）それはどの写真か、わかるように説明する（3）その人物像について（同世代か、同性か、自分に似ているか、理想像か、人間以外のものか、など）、について説明を求めた。他者、動物についても同様に説明を求めた。他者については自分とどのような関係の人かの説明も求めた。

自分のコラージュの評定 園田・近藤（2006）で使用した評定項目と同じものを使用した。質問内容はコラージュを作っているとき（作成中の気分）、自分のコラージュを見て「好きかどうか」「自分らしいか」「新たな発見があるか」などについてである。

愛着スタイル尺度 アタッチメントスタイルを「見捨てられ不安」と「親密な関係の回避」の二つの因子の組み合わせで決定するための尺度である一般他者を想定した中尾・加藤（2004）による愛着スタイル尺度（ECR-GO）。30項目、7件法。

結 果

結果の分析基準

①人物の有無について 人物の有無は被験者の回答

を基本に、「いる」「いない」「わからない」で分類した。ただし、被験者自身は「いる」と回答していても人物像の説明およびコラージュ本体を見て、「いる」けれども人物ではなく動物・植物・ぬいぐるみや人形・イラスト・人体の一部（目だけ）などである場合は「非人物」とした。

②コラージュの評定 「コラージュを作っているとき」に関する9つの評定項目の相関をとり、相関が有意（ $r=0.33\sim0.67$ ）であった項目同士をまとめた。その結果「作成中の楽しさ」（「写真が十分にあった」「集中した」「楽しかった」「イメージがわいた」「難しくなかった」の5項目）と「感覚的・発見的」（「感覚的に作った」「予想外のものを貼った」の2項目）に分けることができた。また、できあがったコラージュが「好き」「満足している」「しっくりする」「自分らしい」などの6項目はすべて互いに正の相関が有意（ $r=0.27\sim0.75$ ）であったので、「できあがり満足」としてひとつの得点にまとめた。

③ECR-GOにもとづく4カテゴリーの分類 「不安」得点の平均は3.44（SD=1.16）、「回避」得点の平均は3.65（SD=1.18）であった。平均値を基準に4カテゴリーの分類法に従って参加者を「安定型」（低不安・低回避：26名）、「拒絶型」（低不安・高回避：26名）、「とらわれ型」（高不安・低回避：22名）、「恐れ型」（高不安・高回避：26名）に分類した。表1に男女の内訳を示す。これによると、「とらわれ型」は1名を除いて全員女性であったが、他の型は男性、女性とも均等に分布している。とらわれ型は女性が多いが、それ以外の型は性差がないといえる。

④ECR-GOにもとづく典型群の抽出 「不安」と「回避」の得点の組み合わせでその型の特徴を強く持つ被験者を選ぶため、それぞれの得点の組み合わせについて平均値から1標準偏差以上得点が高い（または

表1 ECR-GOにもとづく4カテゴリーの人数

| | | |
|--------------|--------|---------|
| 安定型 26人 | 男 女 | 9 17 |
| 拒絶型 26人 | 男 女 | 7 19 |
| とらわれ型 22人 | 男 女 | 1 21 |
| 恐れ型 26人 | 男 女 | 8 18 |
| | 合計 | 0 |

(人)

低い)ものを抽出し、「典型」とした。その結果、「典型安定型」6名(不安得点2.22以下かつ回避得点1.92以下)、「典型拒絶型」7名(不安得点2.17以下かつ回避得点4.92以上)、「典型とらわれ型」6名(不安得点4.50以上かつ回避得点2.73以下)、「典型恐れ型」8名(不安得点4.28以上かつ回避得点4.50以上)が抽出された。

結果

1. 「自分」「他者」の有無と「不安」「回避」得点

表2に自分・他者・動物の有無と他のすべての尺度との相関の一覧を示す。相関係数の算出にあたっては、自分等がいる程度の明確さの順に、「いる=3点」「非人物=2点」「わからない=1点」「いない=0点」と点数に置き換えた。不安と回避に注目すると、自分の有無は不安の高さと負の相関があり、他者の有無は回避の高さと負の相関の傾向があった。すなわち、自分

がいる程度が明確であるほど不安が低く、他者がいる程度が明確であるほど回避が低いといえる。これは、第一の予測と一致しており、不安の高い人はコラージュの中に自分を貼らず、回避の高い人は他者を貼らないことをものがたっている。

その他の相関では、他者と動物の有無に有意な正の相関があった。動物は自分より他者と関係があるといえよう。また、自分の有無と作成中の楽しさ、できあがりの満足には正の相関があった。さらに動物の有無と作成中の楽しさに正の相関があった。しかし他者の有無とコラージュの評定には全く相関がなかった。コラージュに人物が貼ってるとしても、それが自分か他者であるかによってコラージュ作成の楽しさやできあがりの満足は異なるのだといえる。

表3では自分・他者・動物について「いる」「非人

表2 全体の相関

| | 不安 | 回避 | 自分の有無 | 他人の有無 | 動物の有無 | 作成中の楽しさ | 感覚的・発見的 | できあがり満足 |
|---------|------------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|---------|---------|
| 不安 | 1 | | | | | | | |
| 回避 | 0.04733 | 1 | | | | | | |
| 自分の有無 | -0.2003 ** | 0.0001 | 1 | | | | | |
| 他人の有無 | 0.00801 | -0.125 † | 0.1176 | 1 | | | | |
| 動物の有無 | 0.02897 | -0.012 | -0.073 | 0.2414 ** | 1 | | | |
| 作成中の楽しさ | -0.129 † | -0.168 * | 0.1728 * | 0.093 | 0.178 * | 1 | | |
| 感覚的・発見的 | -0.1933 * | 0.0394 | 0.0039 | 0.0647 | 0.1132 | -0.18 * | 1 | |
| できあがり満足 | -0.1343 | -0.096 | 0.2573 ** | 0.0819 | 0.1239 † | 0.6039 ** | -0.012 | 1 |

表3 自分・他者・動物の有無と他の尺度の得点の対応

| | | 人数 | 不安 | 回避 | 作成中の楽しさ | 感覚的・発見的 | できあがり満足 |
|----|-------|----|------|------|---------|---------|---------|
| 自分 | いる | 53 | 3.18 | 3.49 | 3.95 | 3.60 | 4.05 |
| | 非人間 | 21 | 3.69 | 4.28 | 3.62 | 3.48 | 3.78 |
| | わからない | 6 | 3.93 | 3.49 | 4.00 | 3.58 | 3.69 |
| | いない | 20 | 3.71 | 3.46 | 3.51 | 3.60 | 3.53 |
| 他者 | いる | 73 | 3.45 | 3.56 | 3.84 | 3.60 | 3.89 |
| | 非人間 | 5 | 3.46 | 3.62 | 3.76 | 3.80 | 4.07 |
| | わからない | 1 | 2.06 | 5.58 | 4.00 | 5.00 | 4.50 |
| | いない | 21 | 3.46 | 3.87 | 3.63 | 3.38 | 3.71 |
| 動物 | いる | 47 | 3.45 | 3.68 | 3.91 | 3.77 | 3.94 |
| | わからない | 9 | 3.72 | 3.13 | 4.31 | 2.83 | 4.13 |
| | いない | 44 | 3.37 | 3.72 | 3.57 | 3.52 | 3.73 |
| | 平均 | | 3.44 | 3.65 | 3.79 | 3.58 | 3.87 |
| | SD | | 1.16 | 1.18 | 0.90 | 1.05 | 0.80 |

物」「わからない」「いない」群ごとに不安得点、回避得点、コラージュ作成の評定得点の平均を示している。全体に自分も他者も「いる」とした人数が多かった。「自分」については、自分があるかどうか「わからない」「いない」群の不安が高く、自分が「非人物」の群の回避が高かった。「他者」については、不安得点には群による差がなかった。回避得点では「わからない」「いない」群の得点が高かった。「動物」では「わからない」群の不安が高く、「いない」群の回避得点が高かった。相関係数算出の際には有無の明確さによって得点化した。明確さの程度より「わからない」という回答をした群の不安・回避ともに高いことがわかる。また、この結果においても自分の有無は「不安」と、他者の有無は「回避」と関連があることが示された。

2. アタッチメントスタイルと自己・他者の有無

表4には「安定型」「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」ごとの自分・他者・動物の有無の人数を示した。それぞれのアタッチメントスタイルの特徴があらわれたのは、「自分」について、「恐れ型」で「非人物」の

表4 アタッチメントスタイルごとの得点の比較

| | | 安定型 | 拒絶型 | とらわれ型 | 恐れ型 | 合計(人) |
|-------------|-------|------|------|-------|------|-------|
| 自分 | いる | 19 | 15 | 11 | 8 | 53 |
| | 非人物 | 4 | 4 | 1 | 12 | 21 |
| | いない | 2 | 6 | 8 | 4 | 20 |
| | わからない | 1 | 1 | 2 | 2 | 6 |
| | | 26 | 26 | 22 | 26 | 100 |
| 他者 | いる | 18 | 21 | 19 | 16 | 74 |
| | 非人物 | 0 | 1 | 2 | 2 | 5 |
| | いない | 8 | 3 | 1 | 8 | 20 |
| | わからない | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | | 26 | 26 | 22 | 26 | 100 |
| 動物 | いる | 12 | 12 | 9 | 15 | 48 |
| | いない | 10 | 12 | 10 | 10 | 42 |
| | わからない | 4 | 2 | 3 | 1 | 10 |
| | | | 26 | 26 | 22 | 26 |
| コラージュ評定の平均値 | | | | | | 平均 |
| 作成中の楽しさ | 3.93 | 3.94 | 3.74 | 3.56 | 3.79 | |
| 感覚的・発見的 | 3.58 | 3.73 | 3.41 | 3.56 | 3.58 | |
| できあがり満足 | 4.01 | 3.97 | 3.81 | 3.68 | 3.87 | |

頻度が非常に高いことである。また、「とらわれ型」は「いない」が多い。その他については明確な違いは見出せなかった。さらに、コラージュの評定では、「安定型」「拒絶型」は「作成中の楽しさ」「できあがり満足」が高く、コラージュを楽しんでおり、「とらわれ型」「恐れ型」はコラージュがあまり楽しくなくできあがりの満足度も低いことがわかった。「拒絶型」はもっとも「感覚的・発見的」であり、拒絶型にとってコラージュは楽しくもあり、自己発見もできるものであるといえる。

表5には分析基準④にしたがって選出したそれぞれのアタッチメントスタイルの典型者の結果をまとめた。さらに園田・片岡(2007)の見出した文章の特徴にもとづいてコラージュを「写真の量」「まとまり・統一感」「その他の特徴」の観点から分類した。「写真の量」は「空白が多くアイテム数が少ない、表現したいことについて最低限の写真しか使用していない」という情報量の少ない表現、「用紙の大きさに応じた適度な量の写真を使っている」中間のもの、「写真が多い、重ね貼り、同じものを多量に貼る、未整理で雑多な印象」という量が過剰に多いものである。統一感については「現実的なストーリーがあり、わかりやすい」「未整理で雑多な印象」「空間の使い方が巧みで、視覚的によくまとまっている」ものである。その他の特徴としては「幻想的であり具体的な意味を読み取りにくい芸術的」「人物がすべて実写ではなくイラストや身体の一部」「アイテムが四角く切り取られている」などである。図1～4にそれぞれの例を示す。

これを見ると、アタッチメントスタイルによって一貫したコラージュの特徴がみられることがわかる。「安定型」は全体に中間的で、写真の量は中程度、まとまりも中程度、自己・他者は「いる」「現実的」である。「拒絶型」は「写真の量は少ない」まとまりは中程度、自己像は「一貫していない」他者像は「いる」である。しかし、自己・他者は「いる」ものの、人物はマンガやイラスト、キャラクターなどが多い。また、アイテムを四角に切り取っている割合が高い。「とらわれ型」は写真の量が多く、まとまりがなく雑多な感じ、自己像は「いない」ものが多い。他者は「いる」ことが多い。その他の特徴は、たくさんの人(特に女性)が全面に貼られていること、化粧・花・菓子などが無数に貼られているものが多いことである。「恐れ型」は写真の量が少なく、統一感が非常に高い。また自己像が非人物である割合が高く、コラージュの印象としては幻想的で美しいがさびしい感じ、しかし芸術

表5 ASの典型群におけるコラージュの特徴

| （典型者のみ） アタッチメント スタイル | 被験者番号 | 写真の量 | まとめり・統一感 | 自己像 | 他者像 | 動物 | 備考 | |
|----------------------------|-------|------|----------|-------|-------|-------|-----------------------------|----------------------------|
| 安定型 | * 31 | 中 | 中 | いる | いる | いる | 大きな笑顔の女性。活動的 | |
| | | 38 | 中 | いる | いる | いる | きれいだが四角の風景が多くやややさびしい。意味はわかる | |
| | * 33 | 中 | 中 | 非人物 | いる | いる | 生活を表している。現実的でわかりやすい | |
| | * 1 | 中 | あり | いる | いる | わからない | バイクが多い。四角 | |
| | | 43 | 中 | あり | いる | わからない | 単純明快。めざす中年男性像 | |
| | | 68 | 多い | 雑多 | いない | いる | いない | 多くの女性と雑貨。 |
| 拒絶型 | * 27 | 少ない | ない | いる | いる | いない | 人はマンガ。拳銃と車がモチーフ | |
| | * 32 | 少ない | ばらばら | 非人物 | いる | いる | 空白が多い。人はいるが、自分は目だけ | |
| | | 35 | 少ない | 中 | いる | いる | いない | 写真4枚だけ。男性とバイク |
| | | 36 | 多い | 多いがあり | いない | いる | いる | 隙間なく貼っているが人の顔がディズニーのキャラクター |
| | | 28 | 多い | あり | 非人物 | わからない | いる | 人はイラスト。自然・きれい・四角 |
| | * 66 | 中 | 中 | いる | いる | いる | 人はイラスト。全体に抽象的・四角 | |
| とらわれ型 | | 29 | 少ない | 中 | いる | いる | いない | 人はいるがすべてバイクと一緒・四角 |
| | | 59 | 多い | 多いがあり | いる | いる | わからない | たくさんの人。マンガのストーリーがある。 |
| | * 62 | 多い | 雑多 | いない | いる | いる | たくさんの女性 | |
| | * 70 | 多い | 雑多 | いる | いる | いる | たくさんの女性 | |
| | * 91 | 多い | 雑多 | いない | いる | いない | 複数の人物とたくさんのコスメ | |
| | | 73 | 多い | 雑多 | いない | 非人物 | いる | 余白は多いがたくさんの動物と花 |
| 恐れ型 | | 2 | 中 | 雑多 | わからない | いる | いる | たくさんの顔と食べ物と飾り |
| | * 45 | 多い | あり | 非人物 | いる | いる | 人がいない。幻想的。意味不明 | |
| | | 19 | 少ない | あり | 非人物 | いる | いる | 人物はいるが薄い線のイラストのみ。 |
| | | 26 | 中 | あり | 非人物 | いない | いない | きれいだがさびしい。四角で物ばかり |
| | * 106 | 少ない | あり | 非人物 | いない | いない | いない | ばらばらの顔など不気味だが芸術的 |
| | * 34 | 多い | あり | 非人物 | いる | いない | いない | 人がいない。物ばかり・芸術的 |
| | 57 | 少ない | あり | いない | いない | いる | 人がいない。室内雑貨のみ | |
| | 63 | 中 | あり | わからない | いる | いる | 幻想的でデザイン的。他者はいるがほとんど目立たない | |
| | 79 | 多い | あり | いない | いる | いる | デザイン的。夢のシーンのよう。 | |

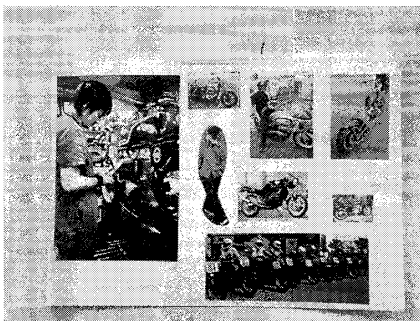


図1-1 (1)

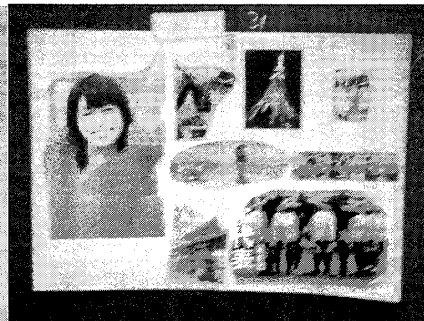


図1-2 (31)



図1-3 (33)

ECR得点で典型的な安定型のコラージュの例
写真の量は多すぎず、少なすぎない。現実的な希望をわかりやすく説明している。

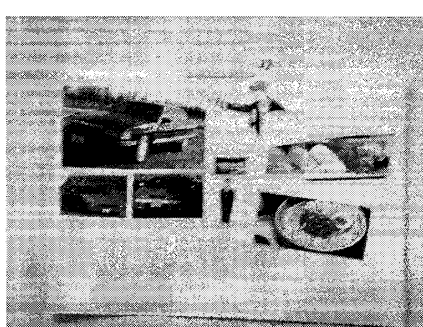


図2-1 (27)

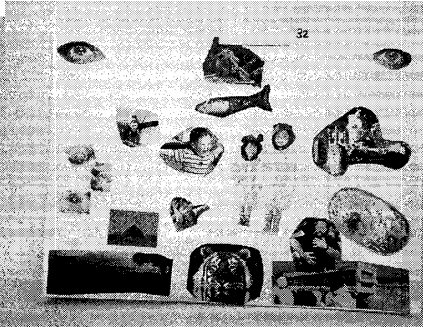


図2-2 (32)



図2-3 (66)

ECR得点で典型的な拒絶型のコラージュの例
写真が少ないまたは四角く切り取っている。イラストの人物、人物の一部（目だけ）などが特徴的である。



図 3-1 (70)

図 3-2 (91)

図 3-3 (62)

ECR 得点で典型的なとらわれ型のコラージュの例
アイテム数が多い、多くの女性（の顔）、ファッション関係の小物などが大量に貼ってある。



図 4-1 (34)

図 4-2 (45)

図 4-3 (106)

ECR 得点で典型的な恐れ型のコラージュの例
自己像が非人物で表わされている。幻想的で抽象的な表現。空間配置に統一感がある。

的で強い印象を与えるものが多かった。また、全体に人が少ない、いても小さく人の存在感の希薄な美しい内面世界を描いたという印象のコラージュがほとんどであった。

コラージュの表現においても、AAI や片岡・園田 (2007) で見出した文章の特徴とかなり共通した特徴が見出された。共通しているのは、「とらわれ型」は情報量が非常に多いが未整理で一貫性が少なく雑多なこと、「拒絶型」はアイテム数が少ないこと、「安定型」は極端な特徴がなく、全体的に中庸でバランスがとれていることであった。しかしコラージュにおいてもっともきわだった特徴がみられたのは、文章完成では特に特徴がとらえられなかった「恐れ型」であった。恐れ型の人のコラージュは自己・他者ともに人物が少なく、これは不安の高さと回避の高さを反映していると解釈できる。しかし、ただそれだけではなく「恐れ型」のコラージュは芸術性が高く、「何かを表現している」

という強い印象を与えるものが多かった。また空間の使い方が巧みで、作品の中に「中心」があり、アイテム数の多少にかかわらず全体の統一感やまとまりがあった。貼るもの、貼る場所を非常に注意深く吟味していたことがうかがえる。また、それぞれ「独自の自分の世界」をもっており、コラージュとして個性豊かな他の誰とも似ていないものを作ることが多かった。「恐れ型」はアタッチメント理論の文脈の中では特徴が明確にされておらず、もっとも不適応なスタイルといわれることもあるが、コラージュの表現を見る限りでは自分の内面に芯があり、豊かな世界を持っていることがうかがえた。

まとめ

本研究はコラージュにあらわれた自己像、他者像とアタッチメントスタイルを測定する ECR 尺度における「見捨てられ不安」と「回避傾向」の関係を検討し

た。先行研究より、不安の低い人は自己像があり、高い人は自己像がないであろうこと、また回避の高い人は他者像がないであろうという予測をたてたが、大筋ではこの予測通りの結果であった。すなわち、自己像がある人は不安が低かった。しかし、もっとも不安が高かったのは自己像があるかどうか「わからない」という人であった。また、回避の高さは他者の有無とは明確な関係がなかったが、アタッチメントスタイルの典型者の分析より、回避の高い人は人物が実写の写真ではなく、イラストなどの「人間を戯画化したもの」である割合が高いことがわかった。さらに、アタッチメントスタイルにおいて「恐れ型」の人は非常に独創的で芸術的なコラージュを作成するが、自己像が「非人物」であることが多い。このように、「不安」と「回避」の違いが反映されていたのは人物像の単に「いる」「いない」ではなく、人物の「描かれ方」であったといえる。

実際に写真の人物はもちろん「自分」や「自分の親しい他者」とは違った容姿をもつが、それを自分や親しい他者に「みてる」ことは不安や回避の高い人には困難なのかもしれない。拒絶型の人は自己も他者もいるが、イラストなどの実在感の薄い人物像が多いのはそのためであろう。逆に、「とらわれ型」は無数の若い女性の写真を全面に貼るなど、人物像の過多が特徴であった。このように、コラージュにおける人物表現、およびそれが自己像であるか他者像であるかはアタッチメントスタイルの内的作業モデルにおける自己観、他者観を反映していること、また自分の周囲の世界に対する関わり方や距離のおきかたがコラージュに反映されていることが示された。このように、コラージュの見方のポイントとして自己像・他者像の有無および表現方法、アイテムの量、全体のまとまり、現実性と抽象性、空間の使い方が重要であること、またそれらはアタッチメントスタイルの内的作業モデルと対応しているということが示唆された。

文 献

- 穴井千鶴・園田直子・津田 彰 2003 首尾一貫感覚からみた育児期女性 (1) —育児不安との関連について— 久留米大学心理学研究, 2, 71-76.
- 穴井千鶴・園田直子・津田 彰 2004 Sense of Coherence と育児期女性—コミュニティにおける心理的支援活動の視点から— 日本理学会第68回大会ポスター発表
- アントノフスキー・アーロン 1987 Unraveling The Mystery of Health (山崎喜比古 他 監修) 2000 健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム 有新堂高文社
- 数井みゆき・遠藤利彦 編著 2005 アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房
- 片岡 祥・園田直子 2007 愛着スタイルの違いはどのように表われのるか (2) —文章完成法からみた愛着スタイルの違い— 日本発達心理学会第18回大会 ポスター発表
- ランドガーデン, H.B. 近喰ふじ子他訳 2003 「マガジン・フォト・コラージュ」 誠信書房
- 森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 1993 「コラージュ療法入門」 創元社
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5,
- 園田直子・穴井千鶴 2003 コミュニティでの活動：育児期女性への心理的援助プログラム 津田 彰・坂野雄二編「医療行動科学の発展…心理臨床の新たな展開」現代のエスプリ, 至文堂 431, 178-190.
- 酒井 厚 1998 IWM と関係の予測—文章完成法による探索的アプローチ— 日本性格心理学会第7回大会発表原稿集24-25.
- 園田直子・穴井千鶴・津田 彰 2003 首尾一貫感覚からみた育児期女性の自己概念—自己概念の再構成課題による育児期女性の心理的特徴の分析— 比較文化研究, 31, 57-72.
- 園田直子・近藤朗子 2006 コラージュの形式的特徴と自己の関連 久留米大学心理学科・大学院心理学研究科紀要, 5, 13-20.
- 園田直子・片岡 祥 2007 愛着スタイルの違いはどのように表われのるか (1) —ECR と他の心理的尺度との関連— 日本発達心理学会第18回大会 ポスター発表
- 園田直子・Timothy Leuers 2001 時間的展望における高揚された自己像—言語的自己と視覚イメージ的自己— 久留米大学文学部人間科学科紀要, 17・18合併号 61-69.
- 杉浦京子 1994 「コラージュ療法」 川島書店

Relationship between Attachment Style and Figures of self and others presented in collage

NAOKO SONODA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

SHO KATAOKA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

Abstract

This study investigated the relationship between the existence of self and others presented in collage, and the degree of “avoidance” and “anxiety over relationships”. The results showed that there were some relationships between the existence of self and “anxiety over relationships”. And also there were some relationship between the existence of others and “avoidance”. The results also suggested that the avoidance and anxiety was not immediately related in the existence of figures of self and others. The most important factor was the ambiguousness of the figures, such as self or others were presented as illustration or not human beings instead of photograph of real persons. Comparing the form of collages made by the subjects groups of four attachment styles of ECR, we found some differences between the styles that very similar to the Adult Attachment Interview protocol.

Key words: collage, attachment style, ECR, figure of self, figure of others